

## ブリ人工種苗中間育成試験

野元聡, 今吉雄二, 池田祐介, 小湊幸彦

### 【目的】

ブリ人工種苗については、従来の天然種苗による養殖と養成・出荷時期が重ならないように早期種苗の生産を計画しているため、早期種苗に適した中間育成技術を開発し、養殖種苗としての品質を検証・評価する。

ブリの早期種苗の中間育成に関しては、水研センターが種子島海域で試験を行い一定の成果が得られているが、本土海域は種子島海域と比較すると、若干水温が低いため、本土海域で中間育成した場合の成長、生残、疾病発生状況を把握し、本土海域に適した中間育成技術の開発を目指す。

### 【方法】

#### 1 供試魚

供試魚は、当センターで生産したブリ人工種苗8,158尾（平均全長：10.5cm、平均尾叉長：9.4cm、平均体重10.3g）を用いた。平成29年3月7日に船を用いて沖出しを行った。

#### 2 中間育成実施箇所および飼育方法

実施箇所は東桜島地先海域。

餌はEP飼料を使用し、給餌は1回/日で飽食となるように行った。なお、日々の飼育管理については、地元の養殖業者へ委託した。

### 【結果及び考察】

#### 1 成長

試験終了時（平成29年3月30日）の体測結果を表-1に示す。

3月末時点で全長11.9cm、体重17.4gに成長した。当センターが毎年行うモジャコ調査における4月の天然モジャコの過去5カ年（H23～27）の平均全長は5.5cmで、同時期の天然ブリ種苗の約2倍の大きさに成長した。

表-1 試験開始時と終了時の体測結果

試験開始時				試験終了時			
日付	全長	尾叉長	体重	日付	全長	尾叉長	体重
	cm	cm	g		cm	cm	g
H29.3.7	10.5	9.4	10.3	H29.3.30	11.9	10.7	17.4

#### 2 生残

試験期間中のへい死魚数を図-1に示す。沖出し直後からしばらくの間は、腹水症および搬出時のスレが原因と考えられる、まとまったへい死が見られたが、その後は、数尾程度のへい死は見られたものの大きな減耗は無かった。

#### 3 水温

試験期間中の水温の推移を図-2に示す。最低水温15.9℃、最高水温18.5℃、平均水温17.4℃であった。

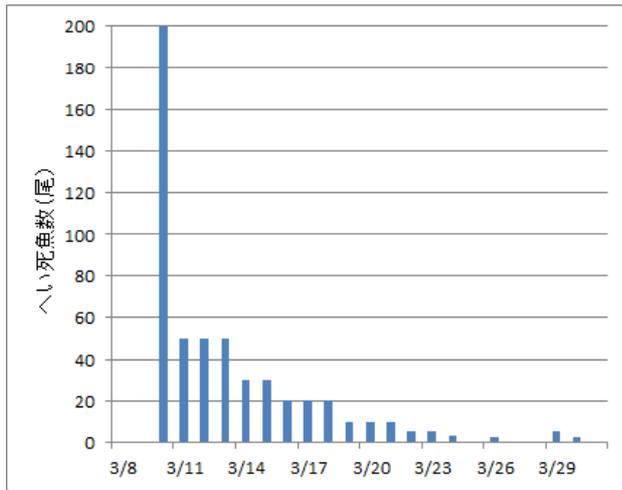


図-1 日別へい死魚数

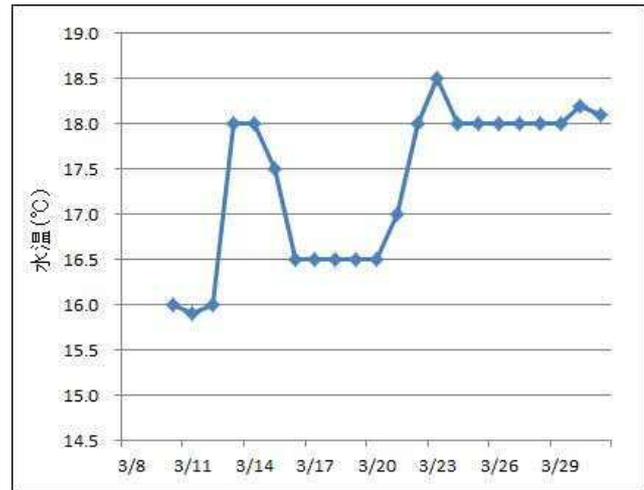


図-2 水温の推移

### 3 形態異常

試験終了の体測時に目視にて形態異常を確認した結果、口部の変形（下顎が短い，上顎と下顎が不整合）が18尾中2尾に見られたが，頭部の変形，体軀の弯曲等は見られなかった。

### 4 まとめ

今回初めて，ブリ人工種苗の中間育成試験を鹿児島湾内で実施したが，3月からの沖出し（16°C以上）であれば成長，生残の結果から十分飼育が可能であること示唆された。

しかし，今年度は親魚の成熟不調の影響で種苗生産開始が遅れ，また，種苗生産後期において腹水症が発症したため出荷時期も遅れてしまい，当初の目的であった，7cm種苗を用いた2月上旬からの試験開始を行うことができなかった。来年度以降は，計画どおりの種苗生産を目指し，2月上旬からでも，鹿児島湾にて中間育成が可能か試験を行いたいと考えている。